アングロ・サクソン
クロニクル（A, E）における属格群

早坂　信

1. ＯＥ（Old English）における属格の用法は，今日では想像もつかない程複雑である。大まかに言うならば，①名詞（代名詞）＋名詞，②動詞＋名詞，③形容詞＋名詞，④数詞＋名詞，⑤前置詞＋名詞，に属格が使用され，⑥副詞的用法，⑦叙述的用法[1]もある。現代英語では①のほかは，ほとんど他の言いまわしに変わってしまったり（例 georndon friðes → yearned for peace）属格語尾が「化石」化して（例 needs, always）しまっている。以上は機能的な分類であるが，意味的分類になるとさらに複雑になり，今日すべて記述できているとは言いがたい。そこで今回は，上記①のうちでも特別な表現である属格群をとりあげ，その形態の分類と，時代が経つにつれての形態上の変化を記述したいと思う。使用したテキストは The Anglo-saxon Chronicle のＡとＥ，すなわち The Parker Chronicle と The Peterborough Chronicle である。本来ならばＯＥの文献の大部分を調べて分類すべきであるが，今その余裕がない。さしあたって上記の２つの MSS. を使用した主な理由は，①他の文献に比べて比較的多くの属格群の用例がある。②ＯＥ盛期の The Parker Chronicle（以下 MS. A と略す）と，ＯＥ後期の The Peterborough Chronicle（以下 MS. E と略す）は，ほとんど同じ内容なので時代的に比較対照できる。③MS. ＥにはＯＥ末期（ＭＥ初期というべきか？）の部分（1122-54）があり，これも時代的に比較できる，の３点である。但し，ここに方言の問題がある。MS. A は West-Saxon 方言であるのに対し MS. E は East Midland 方言である。厳密に言うならば，方言差も考慮に入れるところだが，属格群に関しては方言差は著しく

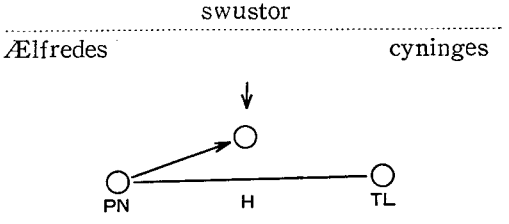
ないだろうと推測し言及しなかった。[2]使用した edition は Charles Plummer の *Two of the Saxon Chronicles Parallel* である。[3]

本文にはいる前に属格群と群属格の相違について言及したい。群属格 Group Genitive というのは，King Alfred's son のように，理論的には King にもつく属格語尾を省略して，Alfred にのみ属格語尾をつける方法である。すなわち属格になるべき語群の最後尾にのみ属格語尾をつけるやり方で，ＯＥではみられないが現代英語では一般である。[4]それにくらべて属格群というのは *King's Alfred's son のように属格であるすべての語に属格語尾をつける方法で，現代英語にはみられない。「属格群」という名称は，筆者が仮につけたもので，英語では E. Ekwall[5] が Genitive of Groups として群属格と属格群の両者を抱括し，前者を Group Genitive (Jespersen も同様)，後者を Split Genitive と名づけている。しかし Ekwall は属格群の一部（例 Ælfredes sweostor cyninges）を Split Genitive と呼んでいるのであって，属格群全体の名称にはあてはまらない。そこで Group Genitive（群属格）から考えて Genitive Group（属格群）という名称をつくって用いることにした。

さて，実際の分類にあたっては，下記のような図式を用い簡素化することにする。例えば

Ælfredes swustor cyninges 888[6]E

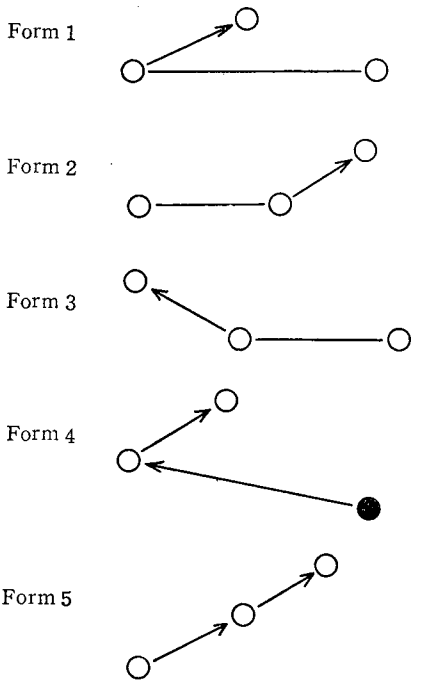
は次の様になる。



上記において，PN は Proper Noun. H は Headword. TL は Title をそれぞれ意味し，時々出てくるＤは Demonstrative とする。単語は○で示し。

同格関係は水平の線——，属格関係は斜線↗であらわし，矢印の方に修飾する。したがってHは，PN，TL よりも一段高い位置に置かれている。

2. 属格群は，称号をもつ人間の家族関係を示す場合（例えば△△王の息子の××）に非常に多く，自ずからそれを構成する要素も限定されてくる。その基本型として，次の5つをあげることができる。それぞれ3つの要素から成り立っている。



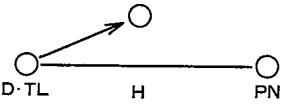
(Form 4 の ● は Of-phrase をあらわす)

上記の基本型をもとにして，多くの複雑な派生型が存在するわけであるが，それぞれについて，その基本型の説明と派生型の説明を例文を示しながら記していきたい。

Form 1 を形成する3要素は H，TL，PN であるがその語順により2つの Sub-Forms が考えられる。その一つの Form 1-a は

þæs cynges mæn Heanriges 1119 E

すなわち



となる。もちろんHが与格になっても TL と PN の格は変化しない。

例　　mid *þæs* cynges huscarlu[(7)] hyra suna 1036 E

この Form 1-a では TL に D がつくが，D の形態は ME に近づくにつれて変化していく。

þæs　　o*þ*res eorles bro*þ*or Ohteres 918 A

þes　　kininges vigeur Æðelredes 675 E (PI)[(8)]

þe　　kinges sune Henries 1140 E

同時に，属格語尾が省略される場合[(9)]もあるし，

þe　king(es) brother Steph(nes) 1140 E

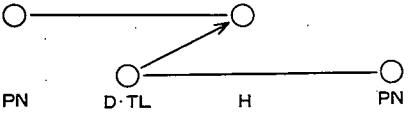
PN の属格語尾が無い場合も OE 末期にみられる。

On　*þ*as kinges dæi Offa 777 E (PI)

for　his wedroðeres luuen Oswi 656 E (PI)

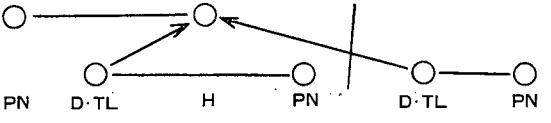
この Form 1-a の H と同格にもう一つの PN をつけると Form 1-a-i という派生型になる。

William *þæs* cynges sunu Heanriges 1119 E



この用例にはもう一組の TL—PN がつき次のような構造となる。

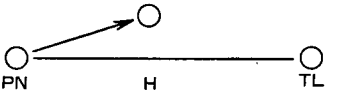
William *þæs* cynges sunu Heanriges 7 *þ*ære cwene Mahalde



図中の垂直線は and（7）を示し，前の D・TL—PN と後の D・TL—PN が（同じ属格ではあるが）同じ物を示さないことを意味している。

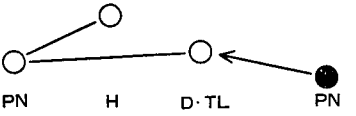
もう一つの Form 1-b は PN—H—TL の語順で

Ælfredes godsune cyninges 890E



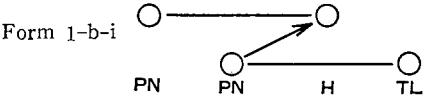
となり，Form 1-a とは PN，TL の位置が交代し，TL には D がつかない場合が多い[10]。OE 末期になると，TL の後に Of-phrase がついた用例も出現する。すなわち

Cnutes sunu *þæs* haligan cynges of Denmarcan 1119E



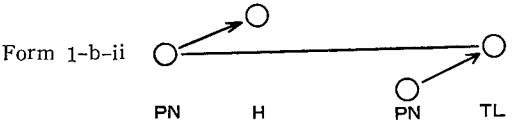
Form 1-a に Form 1-a-i があるように，Form 1-b には派生型が 3 つ認められる。まず Form 1-b-i は PN—H—TL の先頭にもう一つ PN が入り，H と同格となる。

Byrhtsige Beornoðes sunu æðelinges 905A



今度は TL を修飾するものとして TL の直前に新しい PN が入り Form 1-b-ii となる。

ðurh Sirices lare Cantware biscopes 993A（CI）[11]



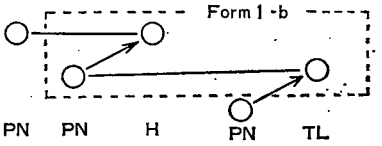
これは構造としては3段で，属格語尾は3ケとなる。但し次の例のように最後の要素に属格語尾がつかない場合もある。

to Karles dohter Francna cining 855A

さて，さらに複雑にしていくと，Form 1-b-i と Form 1-b-ii とをドッキングさせた Form 1-b-iii というのが出てくる。

Sexburh Annan dohter East Engla ciningas 639E

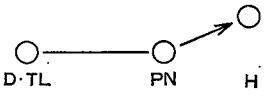
Form 1-b-iii



以上のように Form 1 では Form 1-a より Form 1-b の方が派生型が豊富である。

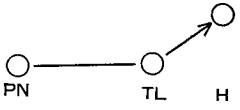
Form 2 では TL と PN が H の前に出て，その語順により Form 2-a

on *þ*æs cynges Willelmes heldan 1079E



と，Form 2-b

of Eadweardes cyninges anwalde 918A



の2組が考えられる。例によって TL が最前にくるとDがつけられている。ここで次の例をみると Form 1-b と Form 2-b が interchangeable であることがわかる。

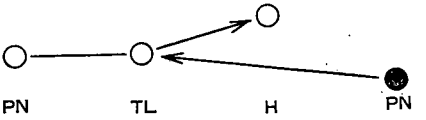
Form 2-b　Ælfredes cyninges godsunu 890A

Form 1-b　Ælfredes godsune cyninges 890E

これらの用例は MS. A と MS. E の同じ場所で使われているので，意味

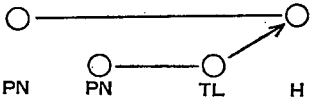
は同じと判定できる。OE 末期になると TL に Of-phrase がつくことも可能になる。

Fulkes eorles gingre dohter……of Angeow 1124E



この場合 Of-phrase は場所を表わす PN がくるのが特徴である。Form 2-b にHと同格の PN がつくと Form 1-b-i となり次のような構造となる。

Ælfgife Cnutes cynges lafe 1037E



この Form 2-b-i では先頭の PN が他の要素から離れている場合

Hlphere {feng to biscepdome ofer Wesseaxan}

Ægelbryhtes bisc̄ nefa 670A

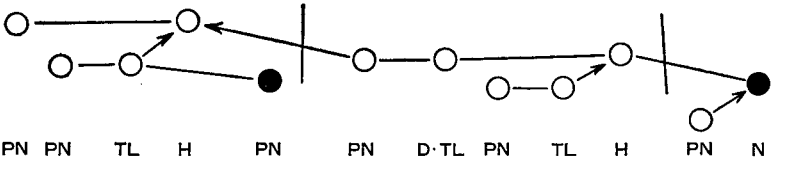
もあるし，また次のように2つ組合せも可能である。この例は MSS. A, E の中で一番複雑な構文である。（Nは noun をあらわす）

Mahalde……Malcolmes cynges dohter of

Scotlande 7 Malgareta *þ*ære goda cwæne

Eadwardes cynges magan 7 of *þ*an rihtan

Ængla landes kyne kynne 1100E



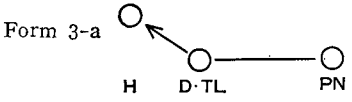
ここでは2組の Form 2-b-i にそれぞれ Of-phrase が付いていて，全体か

らすれば4段になっている。初めてこの例文を読むと，途中で混乱して意味がとれなくなるが，OE期では，このぐらいまでの構文は理解可能であったと推測できる。それは，とりもなおさず属格語尾（この場合は男性形と女性形）が完全に付随しているからである。次の現代語訳（D. Whitelock[12]）における Of とコンマの再三の使用と比較すると興味深い。

Maud, daughter of Malcom, king of Scotland, and of Margaret, the good queen, the kinswoman of king Edward, of the true royal family of England

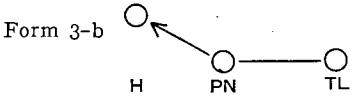
Form 3 も2種類あり， Form 3-a では H-D・TL-PN の語順となる。

mid bledsunge *þ*æs papan Leon 813A, E



前と同様に TL と PN が交替して

nefa Anscalmes ærceb̄ 1115E (PI)



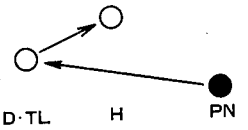
となる。この場合 TL は属格語尾が省略されているが ærcebisceopes と補える。このような省略の例は多く，それがOE末期の属格語尾の脱落に拍車をかけたものとも考えられる。

上記の3つの基本型とその派生型を考えてみると，基本的にはまったく同じであり，ただ実際の表現の段階になると，Hの位置が先頭，中間，後尾のいずれかになり，その選択はまったく自由のようである。

Form 4 は同格の要素がなく，3要素で3段になっている点で，Forms 1〜3 とは性質を異にしている。すなわち

mid *þ*es cynges fultume of France 1094E

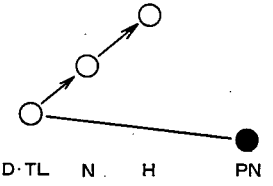
Form 4



Form 4 の特徴である Of-phrase は，多くは外国の地名である。[3] 例 More-toin, Luuaine, Angeow, Normandi, etc. Form 4 が使用されている年代は，やはりＯＥ末期で，ＯＥではみられない Of の使い方（ＯＥでは from の意）はフランス語の影響とみられている。

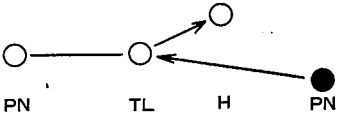
Form 4 の変形として考えられるのが次の４段の例とか

*þ*es kynges wifes swuster of France 1127E



TL に同格要素が前置される

mid Podbeardes eorles fultume of Flandran 1085E



のような例である。この Form 4 のその後の発展はどうなるかといえば，例えば

eorles sunu of Normandi 1127E

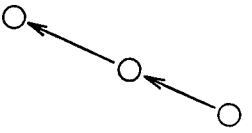
が，現代英語では

Earl of Normandy's son

となることからわかるように，Of-phrase が前に出てきて，それに属格語尾（'s）がつくだけである。その変化の様子は MSS. A, E ではあらわれてこない。

Form 5 は基本的には3要素からなる。例えば

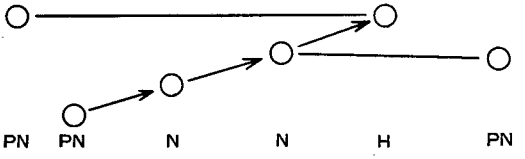
*þ*urh pæs cynges healle geweorc 1097E



のごとく，先頭から順番に属格関係をもつ型である。この場合，同格の要素が新しく加わることがあるが，よほど注意しないと，どの要素に同格なのか判断にまようことがある。例えば

Oswine Ebwines fedran suna sunu Osrices 643E

では，構造は Osric が suna（属格）と同格なのであって



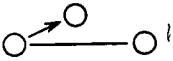
ということになり，現代英語訳は

Oswine, Edwin's cousin's son, the son of Osric

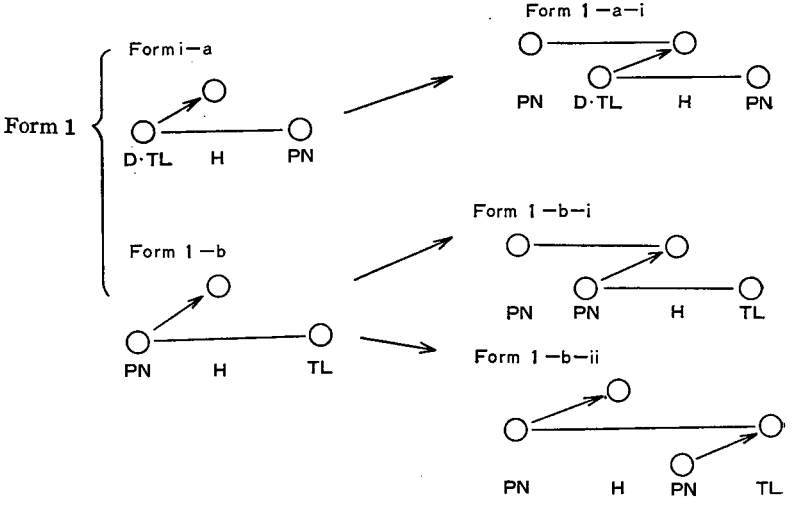
と，fedran sunu＝cousin とし，そのかわり， son を二重に使っている。

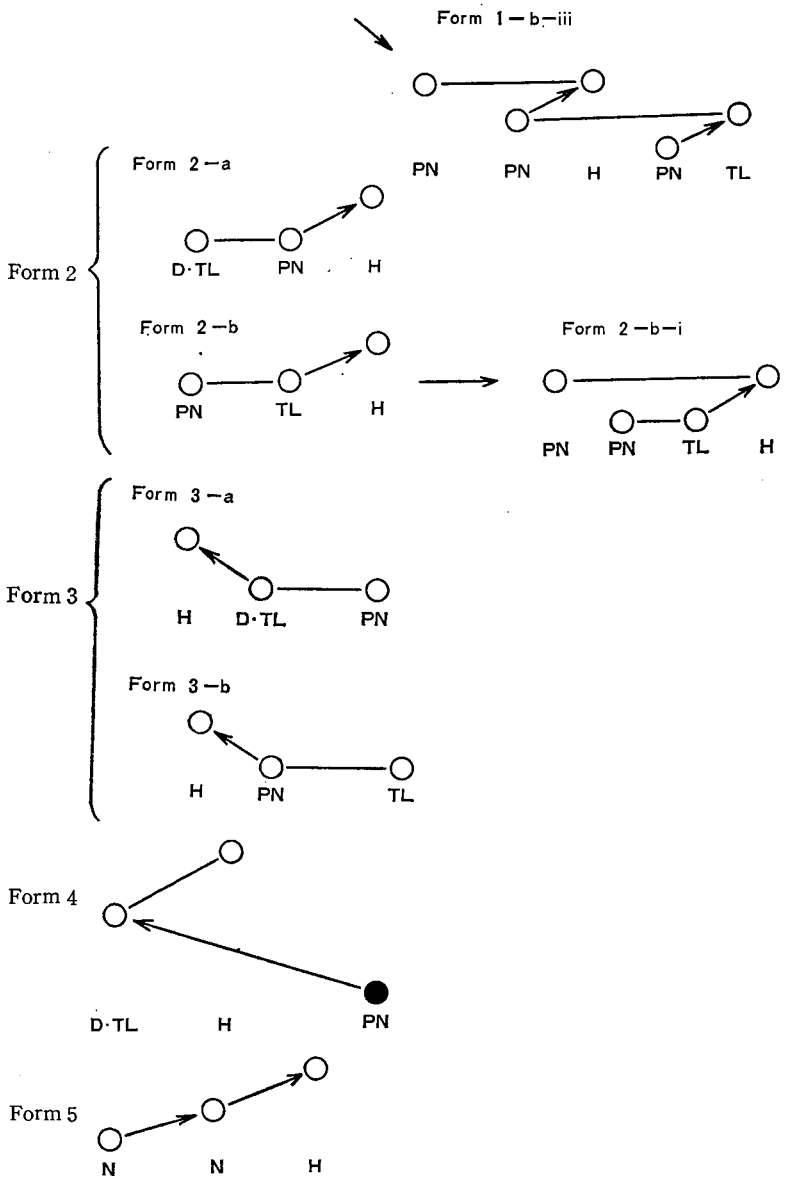
3. 以上で用例の説明を終え，まとめとしてすべての Forms の頻度を掲げてみる。

Form / 年	1a	1ai	1b	1bi	1bii	1biii	2a	2b	2bi	3a	3b	4	5	合計
MS. A	1		4	2	3	1	1	6	1	2	2		1	28
MS. E														
～1121	2	2	10	11	4	2	4	8	6	1	1	12	3	103
1122～54＋PI	12		3	1	1	1	2	3	1			17		
合計	15	2	17	14	8	4	7	17	8	3	3	29	4	
	60						32			6				

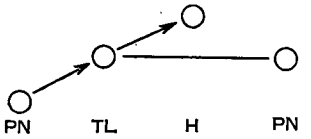
この表からわかることは，第一に，属格群は MS. E の方が約3倍も多いことである。この理由としては，MS. E の方が全体の分量が多いことと，MS. E で属格群を使っている部分でも MS. A では他の表現にしている場合があるためといえよう。第二に Form 1, Form 2 と Form 3 の比率（60：32：6）であるが，Form 1 が一番多く使われている。このHを中心にして修飾語が右と左にある型  は，属格群ばかりでなく，形容詞＋名詞＋形容詞や PN—H—PN（例 Iweres broðor 7 Healfnes 878E）にもみられる。

Form 1, 2, 3 では意味上の相違は無いのだから，これは stylistic な問題であり，O E 期には Form 1 の「やじろべえ」型が好かれたと言っても過言ではあるまい。その後の変化の方向としては，属格要素がすべて前にもってこられて，ついには群属格の形成へと進むのである。第三の特徴としては，時代的な違いの問題である。Form 1, 2, 3 に関しては，はっきりしたことが言えないが，Form 4 は MS. E にのみ存在する。Form 4 の特徴 Of-phrase の出現は O E 末期であることがわかる。ここで今まで述べてきた Forms を全て書いてみよう。

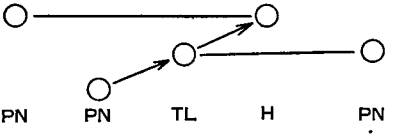




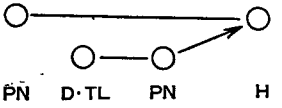
上図をみて，今回の用例中にはなかったが，存在可能な Form を推測することができる。たとえば Form 1- a-ii は

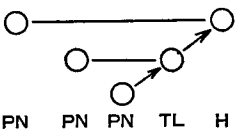
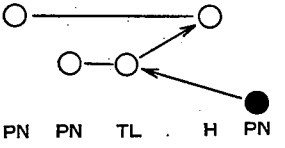


そして Form 1-a-iii は



と推測できる。また Form 2-a-i は



Form 2-b-iii は  か 

となる。

このように仮定していくと，属格群の形成は際限がないように見えるが，やはり人間の（属格群の構成をみぬく）理解力には，どこかに限界があるように思われる。

属格群の構成は複雑にみえるかもしれない。しかしどんなに複雑な属格群でもその中心には以上述べてきたような基本型がある。調査例 131 にすぎないが，基本型の種類はすべて調べられたと思う。

Notes

（1） 例 *þ*ære sawle deað is *þ*reora cynna.

（2） 属格群の構造に関しては，方言差はみられなかった。

（3） Charles Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, OUP, London 2 Vols. 1892 (Reprinted 1965)

(4) Group Genitive に関しては O.Jespersen, *A Modern English Grammar* VI §17 を参照，また Genitive 一般に関しては宮部菊男著「格と人称」（英文法シリーズ巻，研究社）を参考にした。

(5) Eilert Ekwall, *Studies on the Genitive of Groups in English*, Lund 1943

(6) 888 E は MS. E の 888年を示す。

(7) 与格語尾の *-m* が省略されている。

(8) PI は Peterborough Interpolation を示す。

(9) 語尾の省略か脱落かは Plummer の規準によった。

(10) D がつく例 for Saxulfes luuen *þes* abbodes 656 E (PI)

(11) CI は Canterbury Interpolation を示す。

(12) Dorothy Whitelock, *The Anglo-Saxon Chronicle*, A Revised Translation, London 1961

(13) 英国の地名の場合もＯＥ末期にはある。
例 *þ*urh *þ*æs arceb̃ gearnunge of Cantwarbyrig 1114E